

2 学年主任挨拶

2年生の皆さん、こんにちは。いよいよ学校が始まりました。休業期間の3カ月間、どのように過ごしていたでしょうか。家庭での生活が長きにわたり、テレビやネットを見る時間も多かったのではないかと思います。そしてそのメディアでは、みなさんにも関わりのある「9月入学」の件等、コロナを起因とした様々な問題が途切れることなく報じられてきました。そうした情報を知れば知るほど、予測のつかない変化に不安や戸惑いを覚えた生徒もいたかもしれません。私自身、正直なところ「今後の社会はどうなるのかな」と一抹の不安がよぎりました。そんな社会の変化を考えていた時に思い出したのが次の内田樹先生の文です。

生き延びるためには複雑な生体でなければならない。変化に応じられるためには、生物そのものが「ゆらぎ」を含んだかたちで構造化されていなければならない。ひとつのかたちに固まらず、たえず「ゆらいでいること」、それが生物の本態である。私たちのうちには、気高さと卑しさ、寛容と狭量、熟慮と軽率が絡み合い、入り交じっている。私たちはそのような複雑な構造物としてのおのれを受け容れ、それらの要素を折り合わせ、共生をはかろうと努めている。そのようにして、たくみに「ゆらいでいる」人のことを私たちは伝統的に「成熟した大人」とみなしてきた。

(サイト名「内田樹の研究室」2012年2月4日～日本のメディアの病について～より一部抜粋)

この文章そのものはメディアに関する論であり、一部分の抜粋を私の意図に援用するのは、内田先生の本文の意図と逸れるかもしれませんが、私はこの「ゆらぎ」、「複雑な構造物としてのおのれを受け容れ、それらの要素を折り合わせ、共生をはかろうと努めている」という表現を、人の生き方としてとても参考にしています。進路に悩む生徒に、悩む不安を自分の揺れとして肯定的に受け止め、揺れの中から次の自分を探し出せばいいと、この文章を紹介したこともありました。そして今回、社会そのものもこれほど揺れるという事を、私自身再確認しました。そしてその変化に、私たちはしなやかに対応していかなければならないとも感じました。

では、変化に対応していくとはどういうことか。それは変化に合わせ形式を変えつつも、人として行うべき不易なること(=変わらないこと)を着実に行っていくことです。学校で学習していたことを家庭学習で代替していくことは不易なることの代表例ですが、私が2年生全体に求める不易なることとは、「1年生を導く」「3年生を支える」「山門の中核学年として山門高校の顔になる」ことです。たとえ遠足等の学校行事がなくても、君たちの日頃の挨拶の声の大きさや振る舞いを1年生は山門生の指針として見ているはずです。たとえ大運動会やインターハイ等の行事がなくても、君たちにはもっと別の方法で3年生を支えるやり方があるはずです。たとえ文化祭がなくなったとしても、君たちの学校外での行動や姿が、地域の人への奉仕につながるはずです。たとえ「リーダー塾」や「知の創造塾」等の校外研修がなくなっても、君たち全員の心にリーダーとしての芽生えはあるはずです。今こそ、どうやったら不易なることを実践できるか、2年生全員が知恵を出し合う時ではないでしょうか。新たな生活様式とともに、新たな学校生活を作り上げていく主役はあなたたちです。そうした今までにない経験を共にした友人は、たとえ密に触れ合う時間を過ぎさなくとも、しっかりと心で繋がりがえる人生の友となりえるはずです。